光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480－72－3883
振替／東京3－128022
印刷／(株)ドモン企画

お正月おめでとう

社会福祉法人 光の子どもの家

年頭所感
コリントの信徒への第二の手紙（五章十七節）

理事長　福島　勲

伝道の書に「日の下には新しいものはない」、物事は繰り返しであるとある。（一章九節）

時間の推移や同質のものの更新でなく、神による新しさを尋ねねばならない。出エジプト記では、過越の出来事の時、神はモーセとアロンにこの月を初めの月とし、一年の正月とせよと言われた。（十二章二節）

神の恵みの業の時を正月にするなど、モーセたちはまさしく宗教的民族である。

「誰でもキリストにあるならばその人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よすべてが新しくなったのである。（第二コリント五章一七）

信仰に入った当初、この句に悩まされた。変化向上のない自分にひどく失望し不安であった。

やがて「人の義とされるのは律法によるのでなく、信仰によるのである」（ロマ・三章二八節）との句に不安は解消された。古いものが過ぎ去って新しくなったと言うとき、それは神の側の保障であり承認である。キリストによって新たに造られたということは、キリストを信じることによる救いの約束であり保証である。

古いものが完全に新しくなるのは、神の世界の出来事であり、甦りの世界の出来事である。

神の確かな約束である故に、未来は現在として、あるいは現在完了として表現される。そうなるであろうが、そうである、そうなったということである。

田河水泡の人生おもしろ説法の中に「びりでもいいから」という一文がある。伝道集会で佐古純一郎先生の話に、痛く感激し励まされ、自分一人でもいいから信仰を続けようと決心したとある。田河さんの謙虚な表現だが、おそらく救いの秘義にびりも先頭もないものと思われる。

我々は内に新しくされたが外界に目をやれば、地球も汚染されて古びている。

天地創造は宇宙でのビック・バンによって起こり、このような爆発は繰り返される。創造当初の一日は五時間であった。宇宙は膨張している。月は遠ざかり、地球の自転が遅くなり、一日が二八時間にもなる。そして幾億年後には地球は存在しないという科学者がいる。神はサイコロ遊びはしないとはアインシュタインの名句だが、宇宙には法則があり、宇宙滅亡もどうやら杞憂ではなさそうだ。戸毎を訪問し、地球は滅ぶと脅し文句を並べて、小冊子を売り歩きキリスト教と自称する一派の人々の言うことも、あるいは幾億年か後に実現するのかも知れない。

しかし、自然現象からみる終末論には迫力が伴わず、文学的数字が切実感を遮っているが、我々は誰もが死に直面している。

悠久の時からみれば、我々の生涯は点にも等しい。それでもこの生は偶然ではない。

言葉にも業にも神によって新しくされた者としての使命を確信して悔いのない者でありたい。年頭に当たって、もう一度われら何をなすべきかを確かめたい。

成長

施設長　今関　公雄

新年おめでとうございます。開設七度目の新春を、子どもたち三〇名と職員十七名で元気に迎えました。読者の皆様に感謝を持ってご報告申し上げます。

新年は「時」について思いを新たにしてくれます。もっと率直に言えば、普段は自分の年を忘れて生活していますが、新年を迎えるに及び、自分自身の歳月を再認識させられるのです。

光の子どもの家について言えば、その最も顕著な現れは、最年長の子が、目前に高校受験を控えていることがあげられます。彼らが入所したときの光景が、昨日のことのように思い起こされます。あどけない童顔の少年そのものでありました。当時は、家庭に事情があって充足できず、飢餓状態になっていた〈甘え〉を、誰彼の見境なく、全身でむさぼる日々が続きました。時折見せる不安な、暗い表情が、その生育でつくられた傷跡のように覗かせもしました。学習に追いつくのも彼らにとっては至難の業でもありました。なぜなら、落ちついた学校生活や勉学とは、殆ど無縁の幼児学童期だったからです。小学低学年からやり直す現実からのスタートでした。

その彼らが、施設の子としてのハンデを負いながら、思い返すにも胸の痛む、深夜にいたる職員との格闘のような学習活動を懸命に続け、高校を望み得る位置を獲得し、スポーツにも真摯に取り組み、着実な実力を身につけました。体格も頑健となり立派な青年でさえあります。

彼らのここでの生活の歴史は、そのまま光の子どもの家の成長の歩みそのものと言えます。

私事にわたって恐縮ですが、この間の歳月は、短大教師から急遽新米の施設長になり、この地にキリストの教会を建設して福音と社会福祉の共働を図るべく、神学を学び、伝道師として訓練の機会を経て、昨年暮れに牧師になるという、私の人生にも大変動をもたらしております。昨年四月より主日礼拝を同信の友と重ねて参り、この地での教会設立を共に展望しつつあるところです。

「北東埼玉集会」と称するこの小さな群れが、成長してこの地域にしっかりと根をおろし、キリストの十字架と復活を力強く述べ伝えられるようになることを新年の祈りとしております。

この小さな群れの教会で、そして、全国の教会で語られる主の聖言を、光の子どもの家の働きが、証する事に用いられたいという法人設立時の祈りに、呼応できるようになることを新春の望みともしております。

高校を望み、幼稚園に入園する者まで、子どもたちの育ちや職員の成長に支えられて、更なる前進を期す新春でもあります。

「私は植え、アポロは水を注いだ。しかし成長させて下さるのは、神である。だから、植える者も水を注ぐ者も、ともにとるに足りない。大事なのは、成長させて下さる神のみである。」

（第一コリント・三章六～七節）

エッセイ

ねこ

中島　睦雄（県立高校教諭）

仔ねこが五匹産まれた。ねこが生まれたというそのことだけで、家中に活気が湧いてきた。何しろ、人間とねこが同居するのだから、人間がそのことによって影響を受けないわけにはかない。

まず、子ねこのうちに基本的な生活習慣をしっかりと身につけさせなければならない。オッパイを飲み始め、餌を食べるようになると、排便のしつけである。毎日少しずつ、根気よくしつけをする。そして、ねこに手がかかるその多さに比例して、可愛さも倍加してくる。その頃、家の中には、おばあさんねこと、親ねこ、五匹の仔ねこの三世代七匹のねこがいたのである。この三世代の関係は次第に親と仔の関係が中心となって、おばあさんねこには、その役割が殆どなくなってきていた。家の中で自分の役割がないと、自然に今までの力のバランスが変化してくる。おばあさんねこと親ねこが、同時に餌を食べようとすると、親ねこは、おばあさんねこから受けた絶大な恩を忘れ、こともあろうに、おばあさんねこをこっぴどく叱りつけるのである。「かーっ」と自分の子に威嚇されたおばあさんは、一瞬その場でやり返すが、何度もそれが重なると、若くてしかも子どもを五匹も持つ親ねこに負けてしまい、だんだんとふてくされるようになってきた。そして、電話の置いてあるあたりの、高い棚の、狭い場所を見つけて、そこに上がってしまうのである。そして、丸くうずくまって動こうともしない。食欲もなくなってきて、毛のつやも何となくくすんでしまった。そして、すっかり老け込んで、目付きも悪くなってきた。

親ねこの方は、歴代の母親に比べて、子育てが下手であった。母親としての自覚が足りないのだろうか、仔ねこを置きっぱなしにして夜となく昼となく、外をほっつき歩いていた。特に草むらでは虫を追いかけ、捕まえてくることが多かった。それは、母親と言うよりも、少女期の延長線上にいるねこの姿であった。

母親が帰ってくると、仔ねこたちは一斉にオッパイにむしゃぶりついた。そして、より安定した位置を確保しようと、五匹の兄弟たちはひしめき合っていた。強いねこは大きく、弱いねこは体の成長が遅く、差ができ始めていた。

そんな頃、親ねこは突然、黄色い液体を何度も吐いて死んでしまった。獣医さんの話では、除草剤のグラモキソンにやられたのだろうとのことであった。このような症状を呈するケースが、いくつもあるらしかった。除草剤が散布された草むらの中を、特に朝露に濡れた雑草の中を歩き、体に薬が付着し、それでやられてしまうということである。「母親のオッパイにも当然薬がついているから、仔ねこも危ないですね。」という獣医さんの予言通り、次々に倒れ、仔ねこは最も力の弱い貧弱なのが一匹残っただけであった。

四匹の兄弟と母親を同時に失ってしまったチビねこは、おばあさんねこにその温もりを求めた。始めは面倒臭がっていたおばあさんねこも、次第に母親の様な役目をする様になる。とっくの昔に出なくなってしまったオッパイを仔ねこに与える仕草をして丸くなっているのだ。そして、鼠を捕って来ては一緒にじゃれ合ったり、危険を感じると首をくわえて安全な場所へ運んだり、すっかり親と子になってしまっている。あんなにふてくされて、食欲もなく衰えていったおばあさんねこが、見違えるように生き生きして、毛並みも美しく立派になってしまった。

兄弟の中で最も貧弱だった仔ねこは、虚弱だったが故に競争に負け、そのために危うく命拾いし、今ではすっかり成長した。そして、二匹とも家中で大事にされ、威張って暮らしている。

ことによったらねこたちは、自分はねこではなくて、人間の仲間だと思っているかも知れない。あるいは、われわれ人間を、ねこの仲間だと勘違いしているのかも知れないのである。

あけまして　おめでとう

あけまして　おめでとう
ございます。
昨年はいろいろお世話に
なりました。今年も子ども達
と頑張りますのでよろしく
お願い致します。
中村一男

明けまして
おめでとうございます
昨年も1年間ありがとう
ございました。子どもたち
の成長に追いつけるよう、
今年も頑張りますので
よろしくお願いします
坂巻直之

明けまして
おめでとうございます。
昨年中も大変お世話に
なりました。たくさんの方に
支えられて1年が過ぎ
また新しい1年を迎え
られることを心から
感謝します。今年も
よろしくお願いします
岩崎まり子

あけまして
おめでとうございます。
昨年中も、あたたかいお友達を
いただきありがとうございました。
多くさんの方々の後に続いて
ようにつとめたいと思って
おります。今年もよろしく
お願い致します。
金澤はるこ

明けまして
おめでとうございます。
たくさんの方々のお支えに
より新しい年を向えることが
できました。元気いっぱい
の子ども達に影響され
エネルギッシュにがんばります。
みなさまに神様の祝福が
多い年でありますように。
冠木祐子

あけまして、
おめでとう
ございます
皆様の
エネルギーに負けないよう
子どもたちと歩んで
いきたいと思います。
池田祐子

明けまして　おめでとうございます。
寒い季節になっても、外でまっ暗になるまで遊ぶ子どもたちのエネルギーと、こころの揺れをほほえみのうしろに見せる成長が更に育くまれる一年となりますように。今年もよろしくお願いします。
竹花信恵

あけまして　おめでとう
ございます。
本当にたくさんの方々に
支えられております。感謝です。子どもたちと一緒に確実に一歩ずつ前進したいと
願っております。子どもたちの
家としてありつづけるために
頑張ります。この一年も
宜しくお願いします。
田中郁夫

あけまして　おめでとう　ございます
1992年も、
よろしくお願いします。
1年間、あっという間に過ぎてしまいました。子ども達も負けずに成長しています。そんな子ども達とがんばって過ごせますように。五来淑子

虹の国から

あけましておめでとうございます。みなさん　おげんきですか。
ぼくは　こままわしがすきです。みなさんは　おしょうがつ　なにしてあそびますか。ぼくは　あんこもちときなこもちが　すきです。みなさんは　なにが　すきですか。みんなで　たのしく　すごしていますか。なんのうたを　うたいますか。
みなさんの　ところは　ゆきがふっていますか。ぼくのところは　まだ　ふっていません。はやくふるといいな。さようなら。

一ねんせい　うえだ　かずし

明けましておめでとうございます。一九九二年になりました。
今年もよろしくお願いします。
去年の夏、海で遊んだことを思い出します。浮きわを忘れて、なみのりが大変だったことも楽しく思い出します。また、八ケだけのちょう上に登ったことや谷本先生と遊んだことがうれしかったです。
今年は、きょ年よりも、もっと楽しくすごしたいです。
みなさんも、よいお年をおむかえ下さい。

三年生　水谷　萌季

新年おめでとうございます。今年も、よろしくお願い致します。
さて、新年には今年の抱負を持たなくてはその年が始まりません。
私の抱負は、もう少し冷静に物事を見、考え、判断できるようになりたいこと。事情をよく理解せず、決めつけ、悪いことに、それを根に持ってしまうことを何とか克服する。今年は猿年と言うわけでもないが、猿のように笑って暮らしたいの三つです。ところで猿は笑いましたかね。どうも私は笑うことが少ないようで、時には、怒っていると誤解されてしまいそうにさえなるようです。
さて、この年の暮れにはどうなっていますか。

六年生　森　光子

原田家日記

新年、明けましておめでとうございます。
昨年中は、沢山のお励ましと応援を、ありがとうございました。本年も、ご指導下さいますようよろしくお願い申し上げます。
目覚まし時計の音が、また、大変不快に聞こえてくる季節となりました。やはり、冬の朝の苦手な、山口兄弟とその担当者です。
入所して二回目の冬を迎える山口兄弟のことは、昨年の本紙に記しましたが、あの頃を思い返すと段違いに穏やかな朝を迎えられるこの頃です。この一年の兄弟の成長には目を見張るものがあります。
去年度の啓二は、とても不安定な日が続き、私の受容が不足していたのでしょう、幼稚園ではわざわざしてはいけないことを、まるで選ぶようにしたり、出来ることをしようとしなかったり、先生を困らせてばかりの日々でした。
もうすぐ年長組になるというある日、「ぼくはもうばら組になるから、ぐずぐずしないよ！」と、自分から宣言し、その日から全くといえるほど、訳の分からないぐずぐずが消えてしまいました。
幼稚園でも「とても変わりました。みんなの人気者で、啓二君をみんな大好きで、すぐまねをしたりするんですよ」といってお誉め下さり、喜んで登園するようになりました。啓二のお友だちのお母さんから、お家に遊びにきて欲しいとお呼ばれし、「啓二君のおかげでウチの子が外で遊べるようになったんですよ。ウチの子は啓二君が大好きなんです」、とまで言っていただきました。お友だちも、「ぼく、ずっと啓二君と離れないよ！」と言ってくれます。
足りないことや、やりすぎ、失敗だらけのかかわりなのに、いつの間にこんな成長を遂げたのでしょう。家ではお兄ちゃんに助けられてばかりの啓二もたくさん外で頑張っています。お友だちや、そのお母さんに、先生に、そして啓二に、心から「ありがとう」と感謝したい気持ちでいっぱいです。

竹下　由香

まなざし……

佐藤家

明けましておめでとうございます。この年も皆様がお揃いでお健やかに過ごされますようお祈り申し上げます。
私どももまた、子どもたちのよりよい成長のために励んで参りますので、これまで同様よろしくお願いいたします。
佐藤家の長男、睦男は今年は高校を受験します。
昨年十一月に十四才になる前に、背は高い方の私の身長を抜かれ、成長期の最終コーナーに達していることを再確認させられ、ショックを受けました。職員とのやりとりや考え方、物事への思いの深まりなどにハッとさせられることも多くなりました。
生活を創っていく中で、鋭い質問や大人の矛盾を垣間みての疑いなどを浴びせられることも多くなってきました。そんな問や、疑問にきちんと対応できない自分を反省させられることもしばしばです。
「これは、こうしたらよかったんだけど・・。今度からこうするようにするわ」と、対等な関係をつくってきちんと向き合っていかなければならないと、こちらの姿勢を正されるように思えます。
六畳で寝起きしている睦男のところに、時折、小学生が泊まりにいきたがってねだると快く彼は受け入れています。それは、その度に六畳を六畳として使えるように、大変な大掃除を手伝わせて出来ることもあるからかもしれないのですが。そんな日には小学生と一緒になって大騒ぎをしている彼を、「そんなことは外でやって！」と一喝することも、気分がいいものです。
夏やお正月には帰省をせずに受験に備えることを覚悟している睦男に、解決しなければならない課題は多すぎるようにも思えます。
「ここに来たとき、照子さんを先生って呼んじゃったんだよな」入所の頃の話になると決まって睦男がする話です。私は先生ではありません。睦男や子どもたちにとって、私は何になれるのかが試され、なけなしの力が暴かれるような年になりそうです。石毛　照子

子どもたちの季節

仙道家

謹賀新年。本年もよろしくお願い致します。
昨年の九月の終わり頃、二年前に再婚して引き取られて行った塩野姉妹が、父と〈三人〉で遊びにやってきました。時々、電話や便りはし合っていたのですが、会ったのは半年ぶりのことでした。
塩野姉妹にとって、本当の母ではないということもあって問題も多く、家に帰る前も、帰ってからも、父も母も、そして子どもたちも大変な苦労をし、〈もうだめだ！〉という危機を何回か繰り返してきました。それでもご両親が隠さずに真剣に相談に見え、電話で訴え、何もかも私たちに話をしてくれたので、及ばずながらほんの少しのお役には立つことが出来、その危機をどうにか解決し乗り越えてきていました。そして、この春まで半年ごとに四人揃って元気な姿を見せてくれていたのですが・・。この日は〈三人〉でした。
父の話では、大きな原因があった訳ではなく、様々な小さな問題が重なって、母が数カ月前に家を出ていってしまい、今は三人で生活をしているということでした。父は、この事実を二人にきちんと伝え、各々が出来ることをし、協力して暮らしていくことにしたといっていました。四年生になった望はお米を研ぎご飯を炊き、三年生の霞も自分で出来ることが多くなったそうです。「それでも一番大変なのはお父さんですね。」と私が言うと、「でもね、別れて暮らし、寂しい思いをするよりはいいからね～」と、父。父の一言は、楽しさを共有することだけが家族ではない、苦しさも辛さも共に負ってこそ家族であり、その上で一緒に楽しさを共有できるんだ・・、そう自分にも言い聞かせ、訴えているように思えました。
ここには家族・家庭というものを理屈や言葉で理解はできても、現実に味わうことのできない子どもたちが多くいます。そんな子どもたちの家族に、家庭に一歩でも近づけるように・・。力を尽くして願いつつ八回目の春を迎えます。

倉沢　智子

現場から

育ちゆく子らと　十

秋本　光代

新年、明けましておめでとうございます。子どもたち共ども、この一年の成長を獲得することが出来ますよう努力を続けます。これまで同様、暖かいご支援をお願いいたします。

思春期直前の十才前後は、関わり方によって敏感に影響を受け、その影響がその子の生涯を決定しかねない、とても大切な時期だと言われて、関わってきました。性別や生活歴などによって各々違うわけですが、幼いときから関わってきている子には、今までの自分の関わり方や、これからどのようにしていけばいいのか、また、様々なことどもの中で、子どもからも、職員としてのあり方や力量なども試されるような思いになり、たまらなく不安になります。

今担当している子どもたちが年が一桁から二桁になる過渡期である、三年生だった頃をどう過ぎたのかよく思い返します。

六年生になっている光子は、担任の暖かい配慮という初めての経験をして夢中で過ごしたようです。紅子は、体も心も弱々しい感じでしたが、二年生の夏休みの八ケ岳登山をきっかけに、みんなに追いつき、今はしっかりした四年生になりました。

女の子は目に見えるようにその成長が確認できましたが、今一つ男の子ははっきりしません。

滋の四年生は、その年に私の担当に変わり、私との関わりに全力を尽くしたのでしょう、余裕のない時期にしてしまいました。いつまでも消化しきれない甘えを引きずりながら、五年生としてしっかりしようと頑張っています。取り組み残した大きさをどんなに後悔しても九才は戻ってきません。これから滋の心を受けとめる努力をする事が滋への謝罪のように思えます。

三才から担当し、一桁の最後の年の九才真っ直中の將志は、長所短所も把握して、配慮を尽くしてきたつもりだったのに、大きく揺れながら思春期の入り口をさまよっているようです。

そんな將志に、この六月、母親が現れました。丁寧に調整はしましたが、將志は、体を硬直させて生まれて初めての母と出会いました。数時間後に母が去る時は、打ち解けてなごんだ表情で見送っていました。

「ぼくにもお母さんがいた！」と確認をした將志の心は、それまでくすぶっていたモヤモヤをかき消し、明るくなりました。

將志の家族関係は複雑な問題を含んではいても、ともかく母はいて、会いにきてくれたことは、もっとも重く辛い思いの一つから解放されたようです。

もう一つ、彼のこれからの緊急な課題は、私との関係の対象化だとこの頃の將志の表現から気つかされています。

「ぼくはもう一人で何でもできるんだから、光代さんは、怒らないで。いつも笑っていて」私の機嫌がよい時を見計らうように偉そうにいいます。もう赤ちゃんじゃあないんだと・・。

「でも、出来ないことがたくさんあって、先生からお手紙がくるでしょう？」

「そんなこと言ってるんじゃあないの。もう、すぐそう言うんだから」。「だって・・。」

「もういいよ！」

日常生活の中で、優しくいるよりは、叱ることの方がまだまだ多いのですが、この頃、それをはっきり嫌だと表現し、マイナスのことに触れることを拒否するようになりました。光代さんが怒るからと、マイナスを隠してしまうこともしばしばです。

自立のための分離が始まっているんだと言われます。母の存在確認が、分離への不安を越えて未来への希望を付与してくれたとしたら、時宜にかなった母との出会いだったのでしょう。

私にとっては末っ子で、そんな扱いにも不満なのでしょう。

叱ることよりは、話を行き来させて、二桁の年齢になったと言う意味での対等で豊かな関係を確かなものにしていかなければなりません。マイナスを責めるよりは、そのことを残念がったり悲しんで、克服へのバネに出来るように、体の向きや、位置を入れ替えながら。

養護メモ　虫 37

関係　その三

菅原　哲男

楽しみに待ったより沢山の、美しい思いや冒険と頑張る心などのために、惜しみないご協力を頂いた八ヶ岳のプログラムも終わる三日目の朝、谷本先生は、「私のアトリエは粗末で行き届かなくて申し訳なかった。近くに使ってない家があるので来年のために見に行きませんか」と言われた。書記の田中と朝食の前に、宿渡という部落を案内され、少し手を入れれば住めそうなその空き家を見て帰った。

心からの感謝を残し、名残惜しい思いの帰途、谷本先生の友人で、同町に移住して創作活動をされている陶芸家の池端寛先生をご紹介頂いた。池端先生は、アトリエのある素敵なお家で奥様とお嬢様で歓迎して下さった。

ここでも夏の行事のベースを探している話を谷本先生は私たちよりも熱心に話された。

谷本先生よりはお若い端正な面立ちの池端先生は、奥様に、「下の山荘がいいよな。あそこは年に十数日程しか使っていないし」と言われた。「詳しいことは分からないけど、管理人の斉藤さんに聞いてあげたら」と奥様。早速お電話をして下さり、「すぐに来るそうだから行こう」と、子どもたちは仲良しになったお嬢さんと残して、歩いて二分程のその山荘に行った。

青年実業家の斉藤芳嬉氏は、「空いている時はいつでもどうぞ」と、使用料など一切不要、光熱費も提供して下さるという。

こうして、夏の行事の八ヶ岳登山への拠点は確保された。

中島先生→谷本先生→池端先生→斉藤氏と連なる人の関わりに流れる善意に囲まれ、昨年夏の行事を完遂する事が出来た。

人は関係のなかで生きる、とは常々言ってきた。

それには親子関係、特に母子関係が決定的に影響する。

生まれて初めての人間関係は母子関係である。母の胸に抱かれ、乳を含んで人は命をつなぎ成長する。快い時にはほほえみ、喜び、不快な時には泣き、むずかる。ほほえめば、ほほえみ返し喜び合う。泣けば不安を共にして、おむつを替え、さすり、負い、抱き、揺する。快い時の関係のもち方、不快な時の関係のとり方から、していいことやいけないことなど、基本的な人間関係を母子の関係で学習する。

その強化と応用が父との関係であり、兄弟姉妹のそれなのだと思う。家族関係のなかで学習された人間関係は、親戚、幼稚園、学校、そして社会へと応用され拡大されていく。

変人だとか難しい奴だとか言われる人格は、関係のもち方が下手だったり、難しかったりするのである。

娘にとって慕わしい父は、職場ではけむたがられているかも知れない。人格や人柄は、関係のなかで決定される所以である。

ところで、親子関係は、その危機によく表現される。

事故か病気で瀕死の親に、子は自分の命を繋いでも生きていて欲しいと願うだろう。その人でなければ親ではないのだ。

願ったような子どもではないと、どこかに替わりを探し、交換しようと親はしない。取り替えがきかないのである。

人間のかけがえのなさは、関係のかけがえの無さなのである。

親子関係のなかでかけがえのない関係が学習されれば、その応用である人間関係は、それぞれかけがえがないはずなのだ。

人は貨幣や地位や保身などと人間関係を交換した時誇れない。相手のせいにし言い訳をする。それは、本来かけがえがなかったはずのものを、そう扱わなかった負い目があるからである。

親や家族が示すことの出来なかった〈かけがえのない関係〉を可能な限り保障することが我々の任務と確認して励んできた。

昨年の夏、谷本、池端、中島、斉藤氏たちは、人と人との関係のかけがえのなさを当たり前のように私たちに示された。

この新しい年も、多くの中島先生たちであるご支援の皆様に心から感謝して、自らの任務に正面から取り組みます。

大いなる祝福を祈りつつ。

日誌抄

十月一日～十一月三〇日まで

十月一日　宮代町の栗原さんいつものお励まし、感謝。

四日　東京都立船形学園の職員六名が館山市より研修に。共に学習と交歓の時を。

十六日　赤十字奉仕団大利根支部のみなさんが大勢で、草とり奉仕の半日に汗して下さった。手際よく整地も。感謝。

十七日　中学生中間試験。高校受験を目の前にしている二名を中心に、職員とデスマッチのような学習結果を。日本社会事業大学の中里、木原実習生も巻き込まれて。

二七日　アップルクラブとオールドックセンターの方々来訪して、ドックショウとお励ましと交歓の一時。たくさんの賢い犬たちとすっかりお友だちになって。ありがとう！。

二八日　江森ヘヤーサロンのご主人、いつもの散髪ご奉仕、淡々とそしてにこやかに。

三〇日　（株）文鳥より文房具をたくさん頂く。感謝。

三一日　栗橋駅前のタカラブネよりケーキをたくさん。おやつが豪華になって！感謝。

十一月一日　宮代町の栗原さん、事業開設以来六年有余、毎月一日に欠かさずに。お励ましありがとうございます。

四日　第七回感謝の集い。福島勲牧師の司式で、これまで与えられた全てを主に感謝する礼拝を捧げ、祝会は、汗ばむような晴天の園庭に溢れるご支援者の中から、開設以来お力添えの（株）タナカ社長田中作次様、江森誠次様、篠崎秀男様に感謝状と記念品を贈呈して法人、施設あげて感謝の意を表し、飯田進先生、江森藤男町長、青木正久代議士の祝福の言葉をお受けして開催。二百名に迫る参会者は、子どもたちの成長を確かめ、沢田利之さんのオカリナに胸を打ち、飯田洋司さんのアルトサックスに酔い、武蔵暴れ太鼓に、始祖たちに連なる無意識を揺さぶられ、震えるような歓興の時を同じくした。

○第二八回理事会。今年度の第一回補正予算案、地域児童福祉を展望するコミニティ・ホームあるいは自立援助ホームの展開を図るための調査研究事業の開始などを承認した。

七日　東京電力久喜支店より電気器具などを頂く。感謝。

○栗橋タカラブネよりお菓子を。

十六日　町内旗井の山野井さんよりお励ましを。ありがとう。

十七日　数年前から冬の灯油や食料、日用品などをご寄贈下さり熱烈ご支援の桶川市の向後さん。石毛保母の実家からいただいた秋田犬のコロの家を鉄骨で造って下さり搬入。

○中学三年生一回目の三者面談。いよいよ入試に向けて動く！

二三日　青山学院キリスト教学生会のみなさん来訪。環境整備に汗。ありがとう！

二四日　岩槻教会より収穫祭の捧げものを。感謝して頂く。

二七日　剣友会の木場さんより衣類を。いつもありがとう。

二八・九日　アドヴェント・クランツやリースを作るために、遠く神奈川や静岡の山に樅の枝を求め、夜遅くまで作業を。こんな生活を今年も作れました。心から感謝して、よき年の祝福を祈り上げます（くら）

反射光

明けましておめでとうございます☆この正月も殆どの子どもたちが、それぞれの家族の家へ帰省しました☆クリスマスがすみ、大掃除が始まるころ、毎年帰省している子どもたちは、もうすぐ帰れることを心待ちにしだします☆どの子どもも施設で暮らすよりは、例えそれがどれだけ大変だったとしても、家族の許で一緒に暮らすことを願います☆私たちは、どう逆立ちしても親にはなれない事実を具体的に思い知らされる季節です☆他方、帰りたくても帰れない子どもは、担当保母などとここでお正月を迎えました☆現在、養護施設でも勤務体制の見直しや合理化が叫ばれています。人間を合理的に効率よく養育する方法をまず示してから、行政や管理者たちはそれを進めるべきです☆子どもたちに職場であることを可能な限り感じさせない暮らしの場を創りたいと願ってきました☆そんな働きをこそ、責任ある者たちは保障すべきです☆子どもは職場では育たないのですから。（なお）